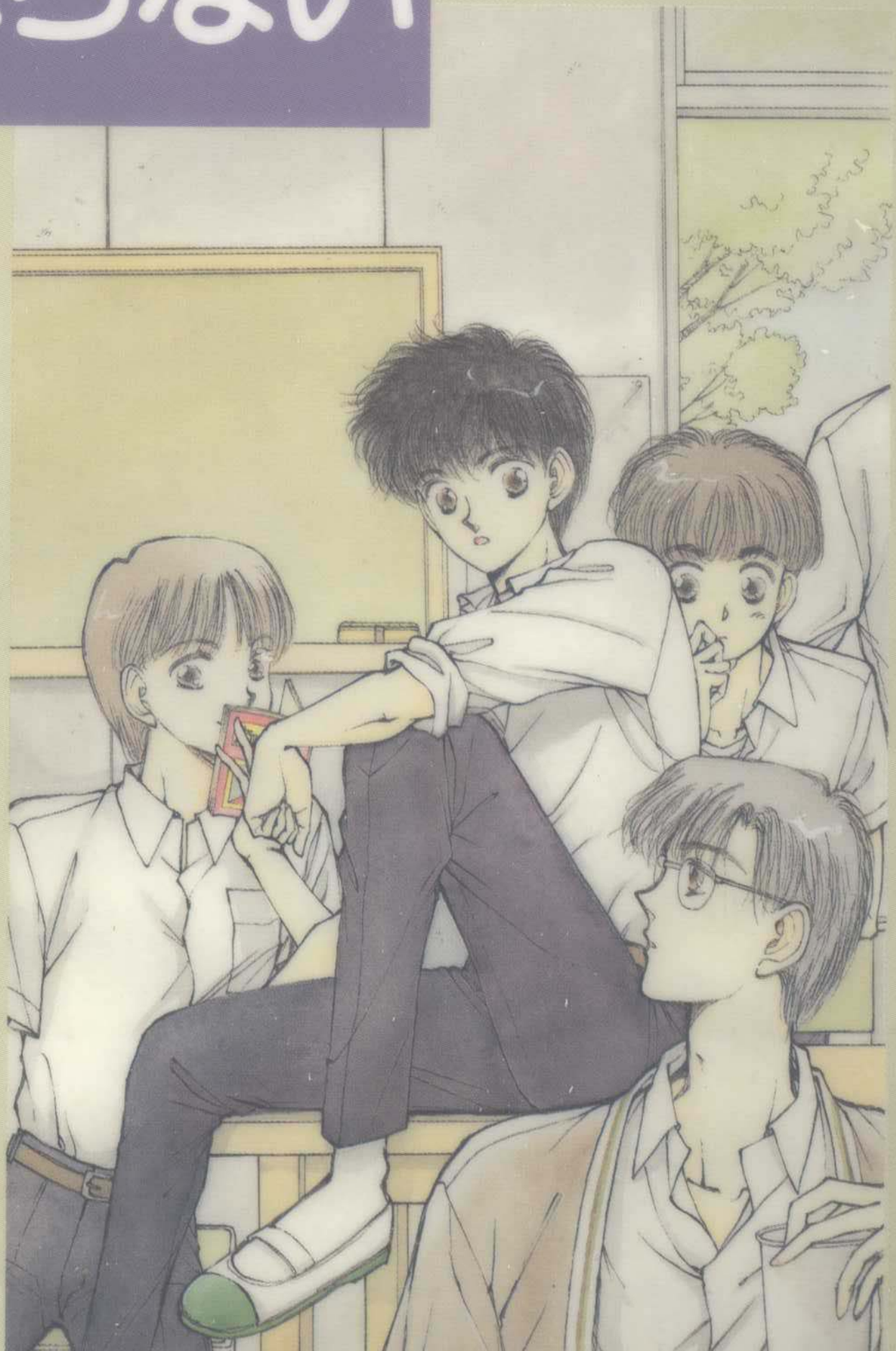
想い出にならない

AKEMI HOTTA

堀田あけみ



作家・イラストレーターの先生がたへの
ファンレター・感想・ご意見などは
〒101東京都千代田区西神田3の6の4
白泉社書籍編集部
気付でお送りください。
編集部へのご意見・ご希望なども
お待ちしております。

想い出にならない

一九九一年八月二六日　第一刷発行

著　者――堀田あけみ
発行人――小長井信昌
発行所――株式会社　白泉社
東京都千代田区西神田三―六―四
電話：編集部〇三―三二六五―一九九七
販売部〇三―三二六五―一九一九
印刷所――大日本印刷株式会社

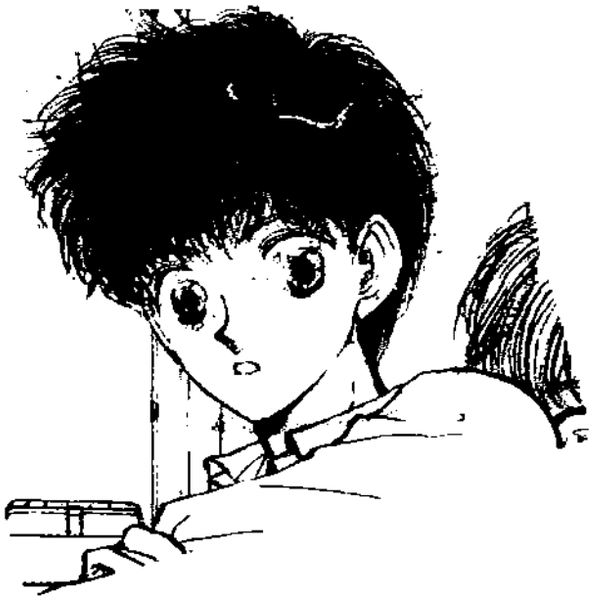
©1991 AKEMI HOTTA, Printed in Japan

ISBN4-592-86003-9 C0293

落丁・乱丁の本はおとりかえいたします。
無断で複写複製することは、法律で禁じられています。
定価はカバーに表示してあります。

想い出　ならない

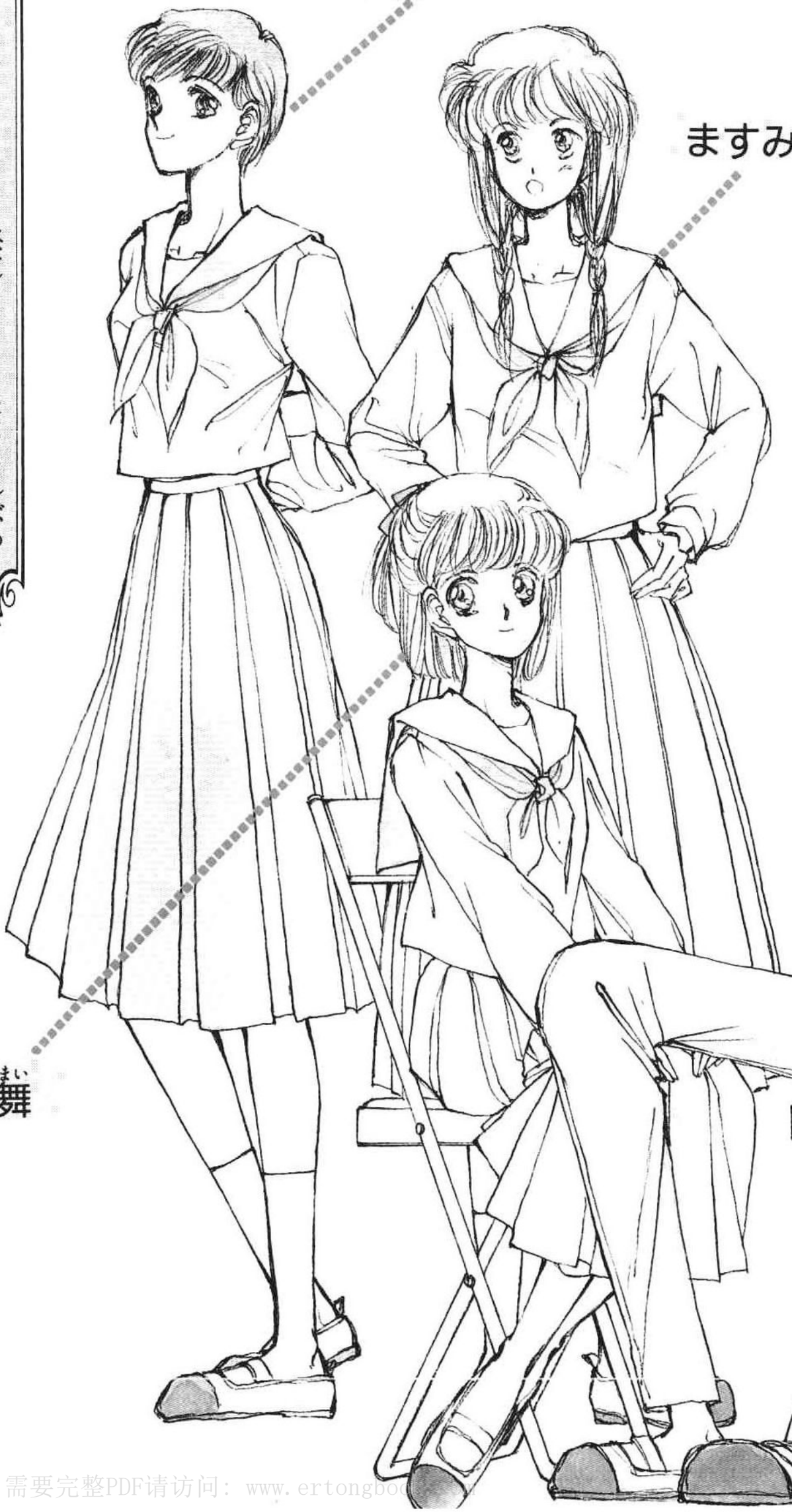
AKEMI HOTTA
堀田あけみ



白泉社

広介
凛
一平
剛仁
方里

♡このお話の登場人物



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

イラスト／河南（かなん）ゆら

想い出にならない

堀田あけみ

目次

1 どうやって始めよう 10
2 少女達の立場 60
3 修学旅行は盛り上がる 106
4 それなりの秋 146
5 お母さんも黙っていない 194
あとがき 230

いつまでも少年ではいられないことを、けして知らなかったわけではない。
俺達は、恋愛や友情のことで頭を一杯にした少年だった。それは確かだ。
けれど「恋愛」という呼称を、「友情」という言い方を、「少年」という言葉を、すべて拒否していた。
それらの存在が、不用意な、使い古された言葉で表されることによって、陳腐な「もの」へと堕落して行くことが怖かった。
俺達は、俺達として、そこに存在することを愛していた。その場所に立ち尽くして、隣に互いがいることを知り抜いていた。そちらを見ることなどしなくても。
俺達は、少年と呼ばれる存在だった。
俺達は、いつまでも少年ではいられないことを知っていた。
そして、いつかは隣り合う互いの身体が、遠く離れて行くことを。
そのとき、心などという日常的、意識的なものでなくてもいいから、精神のどこかが、互いに繋がっていてくれればいいと、祈っていた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1　どうやって始めよう

祭りの準備は楽しい。祭りの後は寂しい。それは両方とも独特の、強烈な楽しさであり寂しさであった。

鬼奴一平は、小さい頃から祭りが大好きだった。秋晴れにあきあかねが、空一面に鷹の爪をばら撒いたように飛ぶ頃のある土曜日、学校から帰ってランドセルを放るなり、弟の亮平を引き摺るようにして、氏神さんへ走ったときのときめきを、秋になるといつも思い出す。それは一生の秋毎に思い出されるだろう。

金木犀に誘われるのは、祭りに向かう思い出ばかりだ。祭りの後、御神輿を担いだお駄賃にともらったお菓子を食べながら、亮平と「サザエさん」や「カルピス名作劇場」を観ていた、あの虚脱感は。

実際に、祭りの後というシチュエイションに自分が放り出されたときにしか、思い出さない。

祭りの本体は、いつも熱に浮かされたように通り過ぎてしまうので、あんまり覚えていなかったりする。

そう考えると、祭りは情けないほど寂しい行事だ。それを大好きな自分も情けなく見えてきてしまう。

一平は、窓から外を見る。頬杖をついて、顎を押さえているので、溜め息が中途半端に鼻から抜けた。窓の外は、今日も空が青い。一平は今、それをただの空の色だと思っている。その色が如何に鮮烈であるかを知るのは大学に入って名古屋に暮らすようになってからである。空が見えるのは、窓の半分からだけで、半分は大きな黒い背中で塞がっている。

「たけちゃん、何見とんのね」

「別に」

小境剛仁は、振り向きもしない。一平は視線を空から地に戻す。

（あれ見とんのか）

地上では、運動部の連中が、学校祭の疲れも見せずに、走ったり跳んだりしている。

窓を、陸上部の天馬安寿子が高速で横断する。男子生徒よりも短い髪。それに反比例して長い手足。整った顔。挑発的な態度。ブルーのウェアは、陸上部指定のユニフォームだが、彼女のそれだけ、他の女子のウェアに較べて、明らかに肩部分の巾が狭く、もっと明らかに、パンツの切れ込みがえぐい。

思い出してしまった。彼女は岩原舞の親友だ。彼女のことをどうしよう。これは祭りの後

の課題だ。
「ああ、えら。一気に気ィ抜けてしもた。これからなっとしょう」
西野万里、通称ばんりが首をこきこき回す。
「とりあえず、中間テストが近い」
林凜が、彼らしいことを言った。東大生の兄を持ち、自身も東大を目指す、性格のいい秀才である。
「あんたらしいこと言うて、つまらんこと思い出させてくれたな」
万里がぶつぶつ言う。気分屋で気が短いのだ。
「ほんとのことやん。ここで手ェ抜いたら、後に響くで、しっかりせなな」
フォローに回るのは、折野広介の役目である。
彼らの通う高校は、高級牛肉で有名な三重県のある市にある。都市と言わなかったのは田舎だからである。サーティワンは無いが特急も停まる。しかし三重県の電車は、特急と言いつつ、どこにでも停まる。
クラスもクラブも異なる彼らが接点を持ったのは、「学校祭準備委員会」が結成されたときである。「準備委員会」だが、当然、後片付けもする。そういうわけで、「第二生徒会室」というこっ汚い部屋で、会計報告だとか、写真の整理だとか、来年への申し送り事項をまとめ

るとか、しなければいけないことの山を前にして、さっきから雑談したり、虚脱感に浸ったりしているのである。

「あらら、五時半やん」

一平が、虚無感から抜け出して、鞄をひっ摑む。バスの時間だ。

「ほんなら俺、帰るわ。ほな、な」

「頑張って走れよ」

「乗れやんだら、うちに泊めたるぞ」

広介や凜のかける言葉など間に合わない勢いで、一平は疾走した。とにかく走る。休むのはバスに乗ってからなら、なんぼでも休めるから。バス停に到着する。遠くにバスが走って来るのが見える。こんなことなら、もう少しゆっくりでも良かった、などとは思わない。このバスを逃したら、一平の家に帰るバスは、明日の朝まで無いのだ。

秋分を過ぎて、五時半ともなると、めっきり暗い。バスが走るのは、山道ばかりなので、外には月と星と闇しか見えない。星が溢れた夜空の豊かさも、大学に入る年齢になるまで一平の知るところではない。

暗い硝子に映る自分を見つめながら、舞さんのことを考えた。まだ、息は少し切れている。

一平は、学校祭準備委員として、半年間苦労したことに対する一番の報酬は、広介・凜・

剛仁・万里に会えたことだと思っている。二番めは舞に会えたこと。三番めが学校祭の成功である。一番めと二番めは、本当は微妙なところだ。本音の本音は逆かもしれない。一平としては、二つを同じ高さに置くべきだとも思う。しかし、人数も四対一であるし、女の子の方を重視するのは、軟派に過ぎるという気がする。

舞とは、一緒に帰ったり（バス停まで）、二人で長い話をしたりした。誕生日にはプレゼントを贈った。日曜日に映画を観に行ったこともある。手作りのクッキーももらった。美味しかった。

「そういうの、つきあっとるって言うねんぞ」

剛仁は口を尖らせて言う。けれど一平は、舞と自分が「つきあってる」だとか、「恋人同士」だとかいうのは、誰が何と言っても認めない。認めないのは一平の自由で（他人から見ると、一平の勝手で）、現実の二人は、紛れも無く「つきあっている」。

そこのところがちょっと複雑なのだ。準備委員会で忙しい間は、複雑なままで放置しても通用したけれど、そろそろ整頓しなければいけなくなって来た。わかっているけど、これ以上、どうやって整頓したらいいんだろう。

一平は長めの髪を、ちょっとかき上げる。中学時代の坊主頭が、目の中からいつまで経っても消えていないから、この髪型は好きだ。ひどく格好良く見える。ちょっと満足しかけた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com